

A I D S

49期生

I テーマ設定の理由

A I D Sには以前から大変興味がありました。発病した場合の死亡率が100%であるということに少し恐れていました。もしなったらどうしようって。また、現代医学を駆使しても治すことの不可能な病気があるということもA I D Sは教えてくれました。

そんなA I D Sの歴史上で1996年は激動の年となりました。いろんなコトが今までであったであろうこのA I D Sというものをもっともっと知りたくなり、このテーマを設定するに至ったのです。

II 研究方法

- (1) 文献調査 社会問題としてのA I D Sに重点をおいたため、主に新聞で何があったかを知る。また他国の状況なども調べてみる。
- (2) 手紙を出す 実際、「自分が感染者である」と公表している方数名に手紙を出し、現在、感染者のおかれている状況を把握する、予定であったが、住所を知ることができず、池田恵理子さん（エイズと生きる時代の著者）にだすだけになった。

III 研究内容

1 日本で最初の女性A I D S患者、死亡。

(1) 神戸の女性がカリニ肺炎で死亡する。

1987年、今から10年前のことです。神戸である女性がカリニ肺炎で死亡しました。図1はその時の新聞です。カリニ肺炎とは、細胞で、健康な人なら病気を引き起こさない寄生虫（ニューモシスチス・カリニ）が免疫力の低下を見計らったかのように増殖し、肺の機能がマヒして窒息してしまうという病気で、エイズ患者の半数以上にみられる症例です。そしてこれが神戸パニックと呼ばれるはじまりでした。彼女もA I D Sだったのです。

(2) マスコミの“スクープ合戦”始まる。

同年1月17日、厚生省からわが国で初の女性エイズ患者がさらにその女性がまたわが国で初めての異性間での性交渉により感染したとの発表がありました。さあ、その次の日から、マスコミによるスクープ合戦が始まりました。まずは翌日、18日の朝刊です（図2）。これは一面トップでした。ここから、エイズの特集を組む新聞、雑誌が続々とあらわれたのです。しかし、それは言うまでもなく度を過ぎたものでした。

それにしてもマスコミの力とはすごいもので、厚生省からの発表が、ほんのわずかの手がかりにしかなくとも、それをもとに、神戸で様々な情報を集め、彼女

エイズの女性死ぬ

半死後 感染経路は不明に

神戸

神戸市東灘区に住む29歳の主婦が、2月18日朝刊「朝日新聞」に掲載された「エイズの女性死ぬ」という記事を読んだ。記事には「神戸市の女性」とあるが、神戸市在住の女性と推定された。記事によると、この女性は、2月18日朝刊「朝日新聞」に掲載された「エイズの女性死ぬ」という記事を読んだ。記事には「神戸市の女性」とあるが、神戸市在住の女性と推定された。記事によると、この女性は、

▲図1(朝日新聞) 87年1月21日朝刊

まだ続き、彼女の幼少の頃の時のことや、どのような職業についていたかなど、エイズに目を向けるというより、彼女の私生活に目を向けられました。図3は、そんな週刊誌の広告の1つです。

さて、このあと、彼女の家族は、ど

うなってしまったか。彼女にはお兄さんがあったのですが、「彼の妹はエイズでなくなった…」と言われ職を失ってしまったといいます。

2 他国のAIDSに対する反応

日本では上のような騒動がありました。他国はどうでしょうか？(数年前の本からなので今と異なることあり)

(1) アメリカ

エイズをめぐる意識調査によると、アメリカ国民の45%がエイズ患者の多くは自分をとがめるべきだとしており、43%の人が、エイズは道德水準の低下に対する罰だとしはしばしば考えるとしている。そんな中でフロリダ州でエイズ・ウイルスに感染した3兄弟が一年近く学校を休まされた上に、そろって登校したところ、全校生徒の約半分が登校拒否をするという出来事があり、そのうえ、3兄弟の家にはさかんに脅迫電話があり、その後、何者かの手により、家は全焼したそうです。

(2) インド

外国人と売春婦に対する、強制的な検査や逮捕、国外追放など、実に荒っぽい形で事態は進行しているようです。

エイズ、初の女性患者

神戸在住 男性から感染し 重体

のお葬式の会場に先まわりをして待っていたといっています。

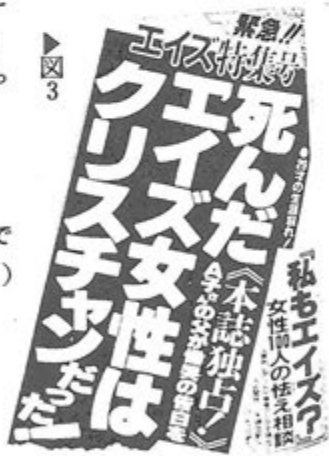
また、彼女のお通夜の席上で、カメラマンが制止を振り切って強行突破し、祭壇にあった遺影を撮影し、自社の週刊誌に掲載しました。

その時の見出しは、「あえて写真公開！感染防止こそ至上の急務だ／エイズ死したこの“神戸の女性”

と接触した人は今すぐ検査を！」というものでした。彼女に対する調査は、

▲図2(朝日新聞) 87年1月18日朝刊

まだ続き、彼女の幼少の頃の時のことや、どのような職業についていたかなど、エイズに目を向けるというより、彼女の私生活に目を向けられました。図3は、そんな週刊誌の広告の1つです。



▲図3

(3) オランダ

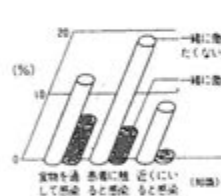
『ニュース・ウィーク誌』で“アムのオランダ、ムチの日本”と紹介されたように、エイズ患者、感染者に高い配慮を示しているようです。

3 日本人のエイズ観

全国の成人1万人を対象とした調査結果から、日本人のエイズ観を集約すると、「エイズについてはTVや新聞などで一応知っているし、エイズが世界や日本で健康を脅かす深刻な問題であることもわかっている。でも、自分の住んでいる地域はエイズには関係がないと思っている。」というふうになります。また、同じ調査票を使ってギリシャで調査とすると、その結果、ギリシャで大多数の人が自分の住んでいる地域の重要な脅威としてエイズをとらえていることがわかりました。

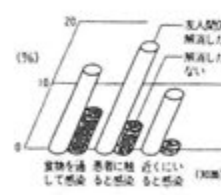
右の図4は日本人とギリシャ人のエイズと感染リスクに関する知識比較、図5は、全米市民と東京都民のエイズに関する知識比較をあらわしたものです。日本人はエイズ感染者の症状や感染経路についての知識が著しく劣っていることがわかります。

いま、私は、日本人はエイズに対する知識が劣っている(他国の人と比べて)と言いましたが、それゆえに、差別的感情も生まれてきます。

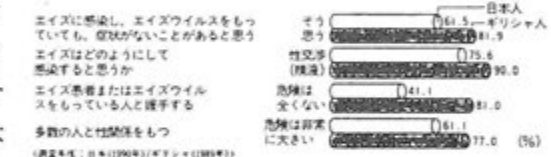
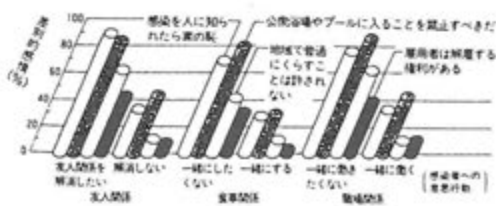


▲図6

左の図6は感染経路に関する知識とエイズにかかった友人との交際継続の意思、図7は感染経路に関する知識とエイズにかかった人と働く意思をあらわしたものです。



▲図7



▲図4



▲図5

さらに図8はエイズに関する差別的感情と感染者への意思行動をあらわしたものです。このような感情をもったままでは、エイズ感染者との隔たりは消えないし、エイズ感染者が社会に出ていくことはできません。

▲図8

4 エイズはなかなか感染しない

差別的感情を取り除くには正しい知識が必要です。日常生活において感染する危険がないことはみなさん、ご承知のことと思います。手をつないでも、一緒にお風呂に入っても、美容院にいったりも感染の危険はありません。ですが、これなら感染するのでは？と思われることがいくつかあると思います。それについて、2点、例をあげて説明しようと思います。

(1) 他の動物のエイズが人間の中に入ったら……

ご承知の方がいるかもしれませんが、今、人間同様、ネコの間でもネコ・エイズが流行しています。死亡率が高いのは人間と同じなのですが、構造が異なるため、なめられたりかまれたりしても、うつることはありません。他の動物にもエイズに似た病気があるのですが、ネコ・エイズ同様、構造が違うので、うつることはありません。

(2) 蚊がエイズ感染者をさして、その蚊が次に私をさしてしまったら……

蚊は人の血を吸って、その血がついた針で、また他人をさすのだから、うつるのではないかと考える人がいるかもしれません。最初は私もそう思っていました。日本脳炎やマラリアがそうだからと考えたからです。確かに、日本脳炎やマラリアの病原体は血を吸った蚊の体内でどんどん増殖し、感染力を得ていくからなのですが、エイズウイルスは人間のリンパ球だけでしか増殖することはありませんから、蚊が感染者の血を吸っても蚊の体内でエイズウイルスが増殖することも感染力をますこともなく、その蚊が他の人をさしてもエイズが感染することはありません。また、神経質な人ならその蚊が吸った微量のエイズウイルスを含んだ血液が気になるかもしれませんが（そこまで神経質なひとはそういないと思いますが……）、ご安心を。ないことはないのですが、もし蚊から感染するとした場合、感染者の血を吸った1000万匹の蚊が一度に同じ人をささなければなりません。ひと夏に1000万匹の蚊にさされるほど、蚊に好かれている人間がこの世にいるのでしょうか……。

それと最後に

- ・目薬
- ・コンタクト
- ・ハブラシ
- ・ヒゲソリ
- ・タオル
- ・ハンカチ

なんかの共用はさけて下さい。

IV 考察

歴史はくり返すといえます。だから私達は歴史を勉強するともいえます。私は神戸事件を新聞や本から知る度に、昨夏にあった『O-157』のことを思うてしまうのです。『O-157』は堺市で集団発生をしたので、エイズよりはもっと身近に感じられ、我が家でもいろんな予防策を行いました。私は奈良県民なので、大して『O-157』で嫌な思いなどはありませんでしたが、大阪府の人、特に堺市の方々は、大変嫌な思いをされたことと思います。

右の図9の新聞記事を目にした人は多くいると思います。これは朝日新聞なのですが、他の新聞も同じことを報道していたので、多分、みなさん、このようなことがあったことはご存知だと思います。二学期の始業式の日校長先生も、宿泊を拒否されたとおっしゃっておられました。

神戸事件と、今年の『O-157』の騒動はとてもよく似ていると思います。かいわれ大根があやしいといわれればそのままかいわれ大根を売り場から追いやってしまいました。もう少しよくよく考えてから行動する必要がありますね。

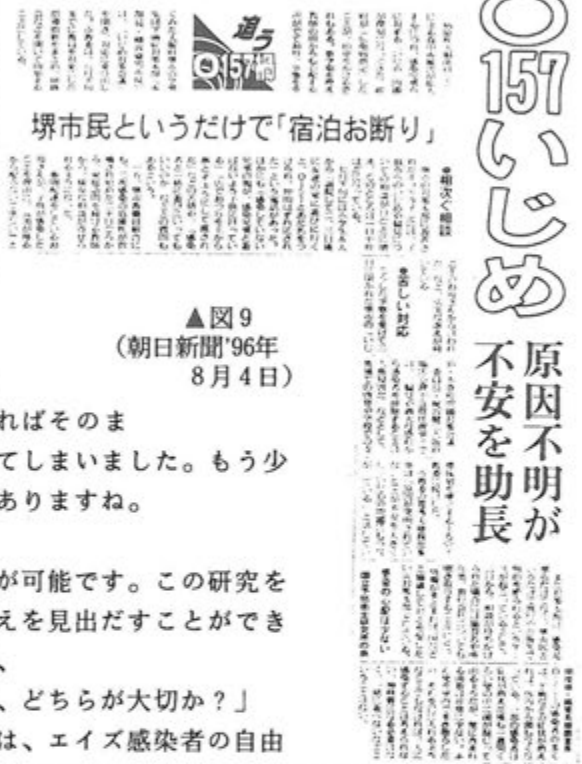
エイズはいつかきつとなくなることが可能です。この研究を進めていく上で、私は一つの疑問の答えを見出すことができず、頭を悩ませました。その疑問とは、

「エイズ撲滅とエイズ感染者の自由、どちらが大切か？」というものです。エイズ撲滅のためには、エイズ感染者の自由を奪うことになるのです。例えば、エイズ感染者が母親として子どもを生むとします。すると、遺伝でエイズが子どもに感染してしまいます。これでは、エイズは消えません。だからといってエイズ感染者に子どもを生む自由を奪ってよいのか？と自問自答をくり返してみるのですが、答えはできません。もともと、その答えをだす権利など、誰にもありません。

V まとめ

昨年は厚生省にも捜査のメスが入り、いろんなコトがあきらかにされました。しかし、そんな悪があばかれたコトも知る事ができずに亡くなられた方がたくさんおられます。自分がなぜ、エイズなのか、知らないまま……。

私には言う資格など、ないかもしれませんが、過去を振り返るのはもうこのへんでやめておいて、未来に向けて、エイズについての知識を深め、エイズ感染者が人として精一杯生きることのできる社会をつくるのが大切だと思います。今や世界中の成人の250人に1人がエイズに感染しており、最悪の場合、2000年には50人に1人の割合でエイズ



▲図9
(朝日新聞'96年
8月4日)

がひろまる予測されています。もうエイズという病気は他人事ではないのです。ですから、エイズとともに生きる社会が必要なのです。そのためには子どもの時から教育が必要になると思います。そこでぜひ御一読して頂きたいのが、「エイズ——手をつないだ位では感染しない——」という本です。絵本なのですが、エイズと上手に付き合う方法がわかりやすくかかれています。絵本なのでページ数もさほど多くはありません。公共の図書館で入手が可能だと思います。私のこの自由研究で1人でも多くの方が、エイズについて書かれた本を手にとったり、エイズについての報道に耳を傾けて下されば幸いです。

最後にもう一度

エイズ感染者が人として生きられる社会を——

VI 参考文献

- 朝日新聞社（1987、1996）朝日新聞縮刷版 '87. 1. '96. 8
朝日新聞社
- 宗像恒次（1992）「エイズがわかる本」法研 206P
- ニキ・ド・サンフィール、大宅映子訳（1987）
「エイズ—手をつないだ位では感染しない」グラフィック社 55P
- 池田恵理子（1993）「エイズと生きる時代」岩波書店 267P
- P R C（患者の権利検討委員会）、技術と人間編集部—共編（1992）
「エイズと人権」技術と人間 206P